

経験の構造

－ Giorgiの現象学的心理学の方法 －

紀平 知樹

要 旨

本稿の目的は、Giorgiの現象学的心理学の分析方法を明確に示すことにある。彼の方法は、質的研究の現象学的方法の主要なもののみなされているが、その方法の用いられ方は必ずしも一様ではない。そうした曖昧さを取り除くために、本稿では彼の分析がどのように進み、何を明らかにしようとしているのかを示す。そのための資料として、彼の方法が体系的に示されている『心理学における現象学的アプローチ 理論・歴史・方法・実践』をもとに考察を行った。

Giorgiは自らの現象学的心理学の目的に沿うように、Husserlの超越論的現象学にふたつの変更を加えている。ひとつには分析は超越論的ではなく、現象学的心理学的に行われるというものである。そのために現象学的心理学的還元が遂行される。もうひとつはGiorgiが求めるのは、普遍の本質ではなく、構成要素間の関係として定義される「経験の構造」である。この経験の構造を示すための手続きとして、Husserlの本質直観の理論とこれまで明確には指摘されることがなかった全体と部分の理論についての理解が必要であることを本稿では明らかにしている。とくに後者の理論を理解することで、構成要素間の関係が何かを理解することができることを指摘している。

Giorgiの著作の読解の結果、分析は以下の段階を踏んで行われることが明らかとなった。

第1段階は他者からの叙述をえる。第2段階は現象学的還元の態度をとること。第3段階は不変な心理学的意味を求める探求となる。この第3段階はさらに次のステップに分けることができる。最初は全体の意味を求めて読むこと。次に意味単位を決定すること。最後は参加者の自然的態度の表現の現象学的心理学的に感受性のある表現への変換を行うことである。こうした段階を経てデータを分析し、経験の構造を明らかにすることがGiorgiの現象学的心理学の手法である。

キーワード：現象学、現象学的心理学、Giorgi、全体と部分、想像変容

I. はじめに

本稿は、Giorgiが提唱している質的研究の方法としての現象学的心理学の分析手法を明確に示すことを目的としている。現象学的方法を用いた質的研究の中で、Giorgiの名前に言及するものは多い。植田(2018)は医中誌Webで「現象学」をキーワードとして2013年から2018年の間に発表された論文を検索してえられた95本の論文のうち、14本が方法論としてGiorgiの名前を挙げていると報告している。これは個人名が挙げられたものとしては最多であり、その次に多いのはBennerの8本である。一番多いのは、ただ現象学とだけ告げたものであり、22本ある。この結果から、Giorgiの現象学的心理学の分析方法が、質的研究の現象学的方法の中の主要なもののひとつであることがわかる。しかし実際に彼の方法を用いた研究を見てみると、分析方法が同じように適用されていなかったり、あるいはその分析方法で何を明らかにするのかということに関しても必ずしも一致していないことがわかる。

筆者が医中誌Webを用いて2017年から2022年7月までの期間で「現象学」と「Giorgi」をキーワードとして論文を検索したところ、13本の論文があった。そのうち入手できた12本の論文で方法の提示においてどのような説明がなされているのかを確認した。

Giorgiの手法を用いた場合、分析の段階をどのように分けているかを確認してみると、分析の段階を7段階として示しているものが1本(名城, 2018)、6段階として示されているものが3本(永井ら, 2017; 豊岡ら, 2018; 白石ら, 2020)、5段階として示しているものが5本(京田, 2018; 高橋, 2018; 関ら, 2020; 小野澤ら, 2020; 河島, 2020)、4段階が2本(山本ら, 2018; 橘ら, 2021)、そして2段階として提示しているものが1本ある(今野ら, 2021)。

また、最終的に何を明らかにするのかについても、経験あるいは体験の「本質」を明らかにする(山本ら, 2018; 小野澤ら, 2020)というものもあれば、経験の「本質構造」を明らかにする(豊岡ら, 2018)というものもあり、また「一般的心理構造」を明らかにするというものもある(京田, 2018; 名城, 2018)。

研究の方法はその背景にある認識論と存在論とも

に、その研究において何が見えてくるかを規定するものである。しかし、その方法が多様に理解されるということは、その方法で見えてくるものの曖昧さを惹起する。こうした曖昧さをできる限り小さくするためには、方法に関する多様な理解の幅を狭めて、曖昧さを取り除く必要がある。そこでGiorgi自身は自らの分析をどのように提示し、それが何を目指しているものなのか、そして彼の分析方法が現象学たる所以はどこにあるのか、それらのことを彼の叙述に従って明確に示す必要がある。そのために、本稿ではGiorgiの現象学的心理学の分析方法が体系的に示されている『心理学における現象学的アプローチ：理論・歴史・方法・実践』を考察の対象とする。

質的研究の方法として現象学が用いられる場合、Husserlに由来する記述的現象学か、それともHeideggerらに由来する解釈学的現象学かということも問題になるが、ここで取り上げるGiorgiの現象学的心理学は、Husserlの超越論的現象学を範とし、彼が心理学の研究に適用可能なものとして改訂したものである。そのことを確認しつつ、Giorgiの分析方法とそれで何を示そうとしているのかを明らかにするために論述は以下のように進む。

最初に、Giorgiが自らの哲学的基盤としているHusserlの超越論的現象学の基本性格を概観する。次にGiorgiが自らの現象学的心理学を構築するために、Husserlの超越論的現象学をどのように変更したのかを確認する。そしてGiorgiが現象学的心理学という立場で何を取り出そうとしているのかをその手続きの段階とともに明らかにする。

II. Husserlの超越論的現象学

1. 意識の志向性

Husserlは最初に現象学を提唱して以降、何度かその立場を変更させている。彼は当初、現象学を記述的心理学と性格づけていた。しかしその後大きな転回が起こり、超越論的現象学へと立場をうつした。GiorgiがHusserlの現象学について言及する際、この超越論的現象学が念頭に置かれているので、まずはこの超越論的現象学とは何かを確認してみよう。

Husserlの現象学が分析の主題として扱うのは、経験

(Erfahrung)である。この経験という語は体験(Erlebniss)や意識(Bewußtsein)などとも言えられる。そして経験のなかでもとりわけ志向性という性格を持つ経験、すなわち志向的经验を現象学的分析の主題としている¹⁾。志向性とは、意識はつねに何かについての意識であるという意識の特性を表すものである。私が何かを見ているとき、その見ている経験は、その対象である「何か」をつねに伴っている。これは意識と対象の相関関係とよばれる。またノエシス-ノエマの相関関係と言われることにもなる²⁾。この相関関係の図式は、主観-客観の二元論の図式とよく似ている。主観-客観の二元論では主観と客観は相互に独立して存在しているとされる。主観-客観の二元論は、西洋の哲学をはじめとして、諸学問においても前提として採用されてきた図式である。それだけに近代的な学問を批判する際に、この図式もまた批判される。後に示すことになるが、Husserlの相関関係という関係はそうした二元論的な図式と同じではないことは注意しておいてもよいだろう。

意識の志向性のもうひとつの特徴は、意識は意味を介して対象へ関係するというものである。このことをHusserlが挙げている「イエナの勝者」と「ウオーターローの敗者」という表現を使って考えてみよう(Husserl, 1928/2015, p.58)。二つの表現はいずれもナポレオンを指示する語であるが、その意味は異なっている。すなわちふたつの表現は、異なる意味を介して、同一の対象を指示している。この例から導き出されることは、意味と対象は区別されるものであり、意味といわれるものは、対象の意識に対する与えられ方のことである。つまり、対象がどのようなものとして意識されているか、そのことが経験されている対象の意味である。したがって現象学的に経験の意味を明らかにすることが課題の場合、この意味、つまり対象が「意識に対してどのようなものとして与えられているのか」を明らかにする必要がある。

2. 超越論的還元

次に、Husserlの超越論的現象学の「超越論的」という語について説明しておかねばならない。先に述べた通りHusserlは現象学を提唱した際、それを記述的心理学として性格づけていた。しかしその後、現象学を規定し直すときに、超越論的現象学へと性格づけを変更して

いる。この変更の経緯については詳しくはここでは述べないが、この立場変更には現象学的還元の問題が関わっている³⁾。

現象学では、その分析を始めるにあたり、自然的態度から現象学的態度への態度変更⁴⁾を求める。そのための手続きが現象学的還元である。現象学的還元においては、判断中止(エポケー)、超越論的還元、形相的還元という3つの手続きが遂行され、そのことによって自然的態度から現象学的態度への移行が可能になるとされる。自然的態度においてわたしたちは、目の前にある対象が、そこに存在しているということを基本的には疑っていない。Husserlは次のようにいう。

私は、一つなる空間時間的な現実が、私に対して向こう側にあるものといったありさまで、恒常的に手の届く向こうに存在しているのを見いだすのであって、その現実には私自身が属しており、また同じく、その現実の中に見いだされまたその現実に同等の仕方に関係している他のすべての人間たちも、その現実に属しているということ、これである。「現実」というものは、この現実という言葉がすでに指示しているように、私が、目覚めた私として、連関を具えた決して中断することのない経験において、現にそこに存在するものとして、眼前に見いだすものなのであり、そして私は、その現実を、それが私に対しておのれを与えてくる通りに、実際また現にそこに存在するものとして、受け取るのである。(Husserl, 1950b/1979, p.133)

ここでいわれているようなあり方が自然的態度である。私は私が見ているものが見ているとおりにそこに存在していると素朴に確信している。その確信を自然的態度の一般定立とよぶ。そしてHusserlはそういう態度をこそ変更しなければならないという(Husserl, 1950b/1979, p.134)。それはDescartesの方法的懐疑に倣った、「普遍的懐疑の試み」(Husserl, 1950b/1979, p.135)である。そしてその懐疑の試みは、定立を停止するという結果に至る。それが判断中止である。

われわれは、その定立を、いわば「作用の外に」置き・働かせないで置くのであり、われわれは、「スエッ

子を切つてその定立の流れを止め・その定立を遮断するのであり」、われわれは、「その定立を括弧に入れるのである」。その定立は、いぜんとしてなおずっと現にそこに存在するのであり、それはちょうど、括弧に入れられたものが、括弧の中に存在し、スイッチを切られて遮断されたものが、スイッチを入れられて接続した連関の外に、存在するのと、同じである。(Husserl, 1950b/1979, p.137)

Descartesの懐疑の試みは、疑いものはないものとみなすという懐疑であったが、Husserlの判断中止は、あるものをないものへと変換するような試みではなく、「括弧付きであるもの」とみなすのである。またこの懐疑は普遍的な試みであり、たまたま目の前にあるこの対象に関する懐疑にとどまらず、わたしたちが生きて生活しているこの世界全体に対する懐疑である。従って世界全体が括弧に入れられる。もちろんだからといって世界がなくなってしまうわけではなく、世界は括弧付きのものとしてされるのである。

「括弧付きである」とはどのようなことかを次に明らかにしてみよう。全世界の存在に関する定立が停止されるとすると、その後といった何が残るのか、これが問題である。Husserlによればこの判断停止によってその残余として見いだされるのは純粹意識の領域である。こうした主張を理解するために、やはりDescartesの方法的懐疑の試みを思い出すのがよい。Descartesはあらゆるものの存在を疑い、悪い神という想定までして徹底的な疑いを遂行した。その中で、もし神にだまされているとしても、だまされる私が存在しなければならないという主張にたどり着いた。あらゆるものが存在しないとしても、そう考えている私は存在しなければならない、ということである。これが「我思う、故に我あり」という主張へとつながっていく。Husserlの判断停止においても、あらゆるものの存在に関する定立を停止したとしても、あるものが存在していると意識しているそのこと自身は残り続ける。こうして現象学の研究領域である純粹意識あるいは超越論的意識の領域が開かれることになる。そして、世界はあくまでもその意識によって意識されたものとなるのである。これが「括弧付きである」という意味である。自然的態度においては、わたしたちの

経験の対象は、その対象としてわたしたちの意識とは独立に存在していると考えられる。そうした対象の総体である世界もまた私とは独立に存在している。しかし、現象学的態度においては、経験の対象は、対象として意識から独立して存在しているのではなく、経験されたものとして意識されるのである。対象は「意識されたもの」である、というのが括弧付きの意味である。

この判断中止によって意識は絶対的な存在領域であるのに対し、対象は意識されたものという変様を蒙り、そのために意識に相関的なものとなる。すなわち対象は意識の所与であり、意識によって構成されたものとみなされるようになる。そしてそれが「超越論的(transzendental)」という語の意味でもある。

超越とは、何かを超えているということである。例えば超越者といえば人間を超えた存在である神を意味する。現象学においては意識を超えたという意味で超越という言葉が用いられる。例えばいまわたしが目の前にある1本のペンを見ているとしよう。そのペンは、見ているという意識に実際に含まれているのではなく、意識の向こう側に存在するものとして意識されている。そういう意味でペンは意識を超越している。しかし判断中止によって、そのペンは意識の外で存在しているという判断を停止されて、ペンはあくまでも意識されたものとしてのペンとして見られている。意識は、判断中止によって見いだされた超越論的意識の領野であると先に述べたとおり、超越にかかわる意識である、そしてその意識は対象を構成するという点で、超越の源泉として機能する意識でもある。それが超越論的という語の意味である。さらに、この超越論的意識は、世界が存在するという判断を停止したところに成り立つものである。とするなら、この意識は括弧に入れられた世界の中にあるような意識ではなく、括弧に入れられた世界を構成する意識であるということである。意識されたものとしての世界がその上で成立する地盤こそが超越論的意識である。対象をこのような超越論的意識の場へと連れ戻すことが超越論的還元である。そしてこの意識の分析を行うのが、超越論的現象学の課題である。

3. 形相的還元

Husserlは超越論的現象学を事実学としてではなく、

本質学としても規定している。事実学とは、経験によって把握される空間、時間的に存在する事実や自然法則などを扱う学問である。例えば、物理学や化学や生物学などは事実学である。事実学が扱う空間、時間的なものは偶然的なものである。そして偶然的なものは別でもありえたという性格を持つ。それに対して本質学とは、本質に関する学問であり、それは必然的なものに関わる (Husserl, 1950b/1979, p.62)。

判断中止を遂行し、対象が意識されたものとして把握されているとしても、その対象はまだある特定の空間と時間において意識されたものである。Husserlはそうした偶然的な存在を手がかりに、その対象の本質へと迫ろうとする。そのために必要な手続きが形相的還元である。これは事象の対象の偶然性を廃棄することによって、その対象の必然的なものを明らかにする手続きである。この手続きについては、後に想像変容による本質直観として取り上げ直すことにする。

こうした手続きを経て自然的態度から現象学的態度への態度変更を行うことで、現象学的分析が可能になる。Husserlによれば、現象学とは、「現象学的態度においてなされる、超越論的に純粋な体験の、記述的本質論であろうと欲するもの」(Husserl, 1950b/1984, p.37)である。

4. Giorgiの手法を理解するための二つの理論

ここまで見てきたように、Giorgiが範としている Husserlの超越論的現象学は、意識の志向性という基本性格を出発点として現象学的還元(判断停止、超越論的還元、形相的還元)の操作を経て、経験の分析を行うものである。ここではさらに、Giorgiの分析方法を理解するためにHusserl現象学に含まれるふたつの理論をみておくことにする。ひとつは「全体と部分の理論」であり、もうひとつは、「想像変容による本質直観」の理論である。

1) 全体と部分の理論

この全体と部分の理論はHusserlの『論理学研究』(1928/2015)の第三研究において展開されている。Husserl現象学の研究者として著名なSokolowskiはHusserl現象学を理解するための鍵のひとつとして、この全体と部分の理論に関する理解をあげている (Sokolowski, 2000)が、質的研究の方法としての現象学

を紹介する文献の中でその重要性に触れているものはほとんどない⁵⁾。

Husserlは、対象はひとつの全体であるとする。そしてその対象は単一的対象と複合的对象に区別することができる。前者の単一的対象とは、部分をもたない対象であり、複合的对象とは複数の部分からなる対象である。部分もさらにふたつに分けることができる。ひとつは全体から切り離しても存在することができる部分である。それをHusserlは「断片」と呼ぶ。それに対して、全体から切り離すことができない部分のことを「契機」と呼ぶ(Husserl, 1928/2015, p.55)。次に部分の関係については次のように述べる。

或る a そのものが、本質法則的には、それを或る μ と連繋する或る包括的統一体の中でのみ実在しうるに過ぎない場合、われわれは、或る a そのものはある μ による基づけを必要とする。(Husserl, 1928/2015, p.49)

全体をなす諸部分の関係は基づけ関係である。そして、 μ なしに a が存在できない場合、 a は μ によって基づけられている。この基づけ関係は一方的な基づけ関係と相互的な基づけ関係とに分けることができる。

a が μ を必要とし、 μ もまた a なしには存在できない場合、相互の基づけ関係である。例えば意識の志向性における意識と対象の関係を考えてみよう。意識することは「何か」を意識することであり、その「何か」は意識の対象である。意識されるものは意識することなしには意識されない。したがって、意識と意識されるもの、すなわち対象は相互に基づけている。他方で、 a は μ によって基づけられているが、 μ は a によっては基づけられていない場合、それは一方的な基づけ関係である。例えば「私は昨日、一羽のカモメを見たことを思い出している」という経験を考えてみよう。この「思い出す」という経験は、それに先だって、「一羽のカモメを見る」という経験なしには成立し得ない。そうだとすると、この思い出すという経験は、「一羽のカモメを見る」という知覚経験によって基づけられているのである。その逆はないので、これは一方的な基づけ関係である。

こうした諸部分の基づけ関係によって全体が成立するが、何が全体であり、何が部分であるかはあらかじめ決

まっているわけではなく、相対的なものである。例えば今、3つの黒い点があるとしよう。その3つの黒い点を直線で結んで三角形を作るとする。その場合、その3つの黒い点はそれぞれ三角形の頂点である。その点が三角形の頂点であるなら、それは三角形という全体の部分であり、しかも三角形の頂点であるので、その三角形から独立して存在することはできない契機としての部分である。それに対して、その黒い点を三角形の頂点としてではなく、まさに黒い点としてみることもできる。その場合、黒い点は1つの全体であり、部分をもたない単一的な全体である。

この相対性を経験について考えてみよう。ある経験はどこからどこまでがひとつの経験なのだろうか。例えば「朝食を摂る」という経験を考えてみよう。「朝食を摂る」経験はひとつの全体経験である。そして「朝食を摂る」という経験のうちには、「コーヒーを淹れる」、「目玉焼きを焼く」、「パンを焼く」といった部分経験が含まれている。さらに、「テレビをつける」、「メールをチェックする」といった経験も「朝食を摂る」経験に含まれているかもしれない。もちろんそれぞれの部分経験もまた、ひとつの全体経験として考えることも可能だろう。反対に「朝食を摂る」という経験は、「出勤の準備をする」という経験の部分経験として考えることもできる。このように部分と全体は絶対的な区分ではなく、相対的な区分である。

さて、「朝食を摂る」という全体経験のうちのいくつかの部分経験をあげたが、それらすべてが「朝食を摂る」経験にとって不可欠かどうかを考えてみる必要がある。例えば、「朝食を摂る」という経験が、「テレビをつける」という経験なしでも成立するのであれば、「テレビをつける」という経験は、「朝食を摂る」という経験にとって不可欠な経験ではない。また、「朝食を摂る」経験にとって、「パンを焼く」という経験が不可欠なのであれば、「朝食を摂る」という経験は、「パンを焼く」という経験によって基づけられているといえる。このように、全体経験のうちの部分経験の性格を明確にしておくことが、経験の分析にとって必要である。

2) 想像変容による本質直観

全体と部分の理論と並んでGiorgiの現象学的心理学の

方法を理解するために必要な手続きが、想像変容による本質直観といわれる操作である。この操作は形相的還元と密接に関わっており、現象の本質へと迫るための手続きである。

先の形相的還元の項においても述べたが、本質学としての現象学では事実を本質必然性へと転換する必要がある。しかし、私たちの日常的な経験は具体的な個物に関わる経験であり、偶然性をまとっている。同じような個物をいくつも集めてきて、それらのものに共通する要素を取り出す帰納的な方法は、やはりまだ事実の段階にとどまっている。そうした事実から抜け出すために、Husserlは虚構の重要性を説く。

「虚構」こそは、一切の形相的学の生の要素をなすと同様に、現象学の生の要素をなすものであり、虚構こそは「永遠的真理」の認識がそこからその養分を汲み取ってくる源泉である、と。(Husserl, 1950b/1984, p.26)

ここで虚構という言葉から、Husserlが本質を好き勝手に作り上げようとしていると理解してはならない。具体的な個物に関する経験は、常に本質に関する経験へと転化可能なのである(Husserl, 1950b/1979, p.64)。その操作は後年、Husserlの死後にまとめられた『経験と判断』という著作において明確に述べられている。

純粹概念ないし本質概念を獲得するには経験的比較だけでは不十分で、経験的に与えられるもののうちに最初に浮かび上がってくる一般性が、特別な防止策によって何よりもまず偶然性の性格をとりのぞかれねばならない。その行為がどのようなものをまず概念的にとらえてみよう。それは、経験的ないし空想的対象を任意の見本にかえ、その見本に同時に指導的「原像」の性格を持たせて、ひらかれた無限に多様な変項の生産の出発点とする作用、つまり、変項作用に基礎を置いている。(Husserl, 1964/1975, p.328)

ここで重要なことは、各変項は任意なものとして扱われるということである。そしてこの任意な変項の中で不変項として現れるものは、「その種類の対象が考えられ

るために必要不可欠のもの」(Husserl, 1964/1975, p.329)であり、それを見て取ることが本質直観である。このような操作は帰納的推論と理解されるかもしれないが、数学的帰納法が帰納的推論ではなく、演繹であるように、想像変容による本質直観もまた帰納的推論ではない⁶⁾。

以上でHusserlの超越論的現象学の基本的な性格と、この現象学とGiorgiの現象学的心理学の方法をつなぐふたつの理論を概観できたので、次ぎにGiorgiの現象学的心理学の方法について確認していくことにしよう。

Ⅲ. Giorgiの現象学的心理学の方法

1. Giorgiによる超越論的現象学の変更

Husserlは現象学を超越論的現象学として性格づけ、現象学的分析を遂行するための手続きとして現象学的還元を要求しているが、それに対してGiorgiはいくつかの変更を加えてみずからの現象学的心理学を遂行しようとする。変更が必要な理由をGiorgiはふたつあげている。ひとつは、「科学的分析のレベルにおいて仕事することを望んでおり、哲学的レベルにおいてではない」(Giorgi, 2009/2013, p.109)からであり、もうひとつは、「それらの分析が心理学的感受性を持つものであることを望んで」(Giorgi, 2009/2013, p.109)いるからである。こうした目的のためにHusserlの「超越論的」現象学は、一定程度の変更が必要である。というのも、超越論的現象学においては、意識は世界を構成する意識であり、それは「人間の視点を超越することを意味する」(Giorgi, 2009/2013, p.114)のであり、人間の視点で分析しようとする心理学にとっては適切ではない。そこでGiorgiは、Husserlが「心理学的現象学的還元と呼んだところのもの」(Giorgi, 2009, p.114)を採用する。

さらにもう一点、GiorgiはHusserlの現象学に対して変更を加えようとしている。それは本質の探究という問題である。本質という語のもつ含意に対して、「大多数の科学者は否定的に反応する」(Giorgi, 2009/2013, p.116)ので、Giorgiは本質の探究ではなく、「具体的な経験の構造」(Giorgi, 2009/2013, p.116)を探究するのである。

もちろんこうした変更によってGiorgiの現象学的心理学が現象学ではなくなるわけではない。実際Husserl自

身、現象学的心理学についてはたびたび言及しているし、Schutzの現象学的社会学は超越論的ではない、内世界的現象学として行われている。したがってGiorgiによる変更も、突飛なものではない。必要な変更は加えるが、「ある分析が現象学的であるという主張は、現象学的還元の態度をとることなしには為しえない」(Giorgi, 2009/2013, p.114)というように、心理学的なものではあれ、現象学的還元はGiorgiの現象学的心理学にとっても欠くことのできない条件である。以上のような変更点と不可欠の条件を踏まえた上で、Giorgiの現象学的分析の手順をみていくことにしよう。

2. 方法の提示

Giorgi自身は、自らの現象学的分析をどれくらいの段階で提示しているのか、これを確認してみよう。研究の段階を大きく分けると3つの段階に分けることができる(Giorgi, 2009/2013, pp.96-106)。第1段階として「他者たちからの記述」をえることである。第2段階として「現象学的還元の態度をとる」ことである。そして第3段階は「不変な心理学的意味を求めめる探求」である。これらの段階をさらに詳しくみていくことにしよう。

1) 第1段階：他者たちからの叙述

一般的に現象学は一人称の観点から経験を分析するといわれる(植村ら, 2017)。実際Husserlは質的研究で一般的に行われるインタビュー調査を行い、その内容を分析していたわけではなく、自分自身の知覚経験などを素材にして現象学的分析を行っていた。しかしGiorgiの現象学的心理学の方法では、「分析されるべき新しいデータは、研究者からではなく、他者からえられなければならない」(Giorgi, 2009/2013, p.111)とし、他者の経験を分析することを出発点としている。

2) 第2段階：現象学的還元の態度をとる

次ぎの段階は現象学的還元の態度をとることである。哲学としての現象学と現象学的心理学での現象学的還元の重要性と相違点はすでに述べたので、ここでは現象学的還元の態度をとるのは誰か、ということだけを明らかにしておく。哲学としての現象学であれば、分析の主題となる経験とその経験を分析するものとは同一人物であ

ることが多いが、Giorgiの現象学的心理学においては、分析の素材となる経験を提供する者とそれを分析する者は異なる。ここで現象学的態度をとらねばならないのは、経験を分析する研究者の側である。それに対して経験を提供する他者は、現象学的態度をとる必要はない。Giorgiは「参加者たちを現象学的概念と理論に関して素朴な状態にとどめておくことが望ましい」(Giorgi, 2009/2013, p.99)としている。

3) 第3段階：不変な心理学的意味を求める探求

第3段階では実際にインタビューデータの分析が行われる。そしてこの第3段階は、さらにいくつかの手続きが含まれている。これをどの程度のステップに分けるかによって、研究者ごとの段階の数のばらつきが生じる原因となっていると思われるが、ここでもGiorgiの主張に忠実に従ってみよう。

4) 全体の意味を求めて読む

全体の意味を求めて読むのは、不変な心理学的意味を明らかにするためである。それではその不変な心理学的意味とは何か、これを明らかにしておく必要がある。Husserlの哲学的現象学とGiorgiの現象学的心理学の相違点の一つがこれに関わる。先にも見たが、Husserlの現象学は本質、あるいは形相を求める本質学である。それに対してGiorgiの現象学的心理学は、哲学が求めるような普遍的な本質ではなく、具体的な経験の構造を求めると明言している(Giorgi, 2009/2013, p.116)。他方で、「方法の目標は特定の個人の経験ではない」(Giorgi, 2009/2013, p.198)とも述べ、単に個人の経験の記述を行うことを目的にしているわけでもない。そのためにGiorgiは、最低でも3人の被験者からデータを得ることを推奨している(Giorgi, 2009/2013, p.198)。そしてGiorgiは、いわゆる「中範囲」といわれる程度の抽象度を求めている。というのも「心理学的現実空間-時間的に限定されて」(Giorgi, 2009/2013, p.223)いるものであり、また社会的なコンテクストによっても影響を受けるものであるからである。従って、彼が分析において求めているのはいつでも、どこでも、誰に対しても成立するような普遍的な本質ではなく、一定の状況内で成立するものである。彼はそれを「経験の構造」とよび、経験

の意味を規定することを通して明らかになるものであるという。

私は、分析している具体的な経験の構造を求める。それを、その構造に属する、より高いレベルの形相的な不変の意味を規定することを通して行う。(Giorgi, 2009/2013, p.116)

複数人から得られたデータを通して、ある事柄に関する経験の構造を明らかにするのだが、すべての経験がひとつの構造でまとまる場合もあれば、必ずしもひとつの構造へと収斂されない場合もありうる。そのためにGiorgiは、構造内変動性と構造間変動性という術語を導入する。前者は、すべてのデータを単一の構造に統合できることを意味している。後者は単一の構造に統合することができず、ふたつ以上の構造を書かなければならないことを意味している。

構造内変動であれ、構造間変動であれ、「経験の構造」とは何かをもう少し明らかにしておこう。Giorgiは「構造とは、その構成要素の間の関係である」(Giorgi, 2009/2013, p.119)という。ここではHusserlの全体と部分の理論を思い出す必要がある。Giorgiは「それが属する全体から独立である部分」(Giorgi, 2009/2013, p.102)を単素と呼び、構成要素とは「全体におけるその役割が留意されている部分」(Giorgi, 2009/2013, p.102)であると定義する。ここで単素とよばれているものは、Husserlが断片と呼んでものものであり、構成要素は契機のことである。したがって、その経験が成立するためには欠くことのできない契機を特定し、それら契機の間を明らかにすることによって、経験の構造が示されるのである。これら契機の間は、基づけの関係として分析されることになる。

データから単一の構造が出現すべきだとするならば、全体論的かつ関係論的に「構造の取り出しが」なされなければならない。すなわち、研究者によって心理学的に表現される個々の生活世界的意味は、意識のノエシ的な次元に関連づけられなければならないし、その自発的な脈絡から分離抽出することはできない。参加者たちに通じる共通性を抽象しようと試みること

は、諸部分を構成要素としてではなく、単素として扱うことになるであろう。(Giorgi, 2009/2013, p.118)

まとめると、Giorgiが経験の分析によって明らかにしようとするのは、経験の構造である。その経験の構造は、一切のコンテキストを排除した普遍的な本質ではなく、ある一定のコンテキストにおいて成立するものである。そして経験をひとつの全体とみて、その全体が成立するために必要不可欠な(essential)な契機を見だし、その関係を記述することが求められている。この構造こそがGiorgiが不変な心理学的意味とよぶものであるだろう。

5) 意味単位を決定する

Giorgiが分析の結果として示したいものが経験の構造であることは明らかになったので、その経験の構造をえるための手続を確認してみよう。

まずは全体の意味を求めて繰り返しデータを読むことが必要である。Giorgiは述べてはいないが、意識の志向性という現象学が考える経験の基本的な図式を考えるなら、全体の意味を求めるためには、その意味がどのような対象を指示しているのかも把握しなければならない。すなわち意味は経験がそれを介して対象へと関わるものなのである。従って、データ全体の意味が成立するのなら、その意味が指示する対象も成立している。そして次に、データを意味の単位で区切る操作が必要である。インタビューで語られた内容や、あるいは誰かが自らの経験について記述したものが分析の題材となる。そこにあるものはひとつの全体経験とみなされる⁷⁾。その全体経験は、それを構成するより小さな経験を含んでいるはずである。例えば、私たちがスマートフォンでメッセージを送信するという経験を考えてみよう。それは「メッセージを送る」というひとつの経験である。ただし、その経験はスマートフォンを持ち上げるとか、指紋認証や顔認証によってロックを解除し、目的のアプリを起ちあげ、送信相手を選び、メッセージを打ち、送信ボタンを押すといった一連の諸経験から成り立っている。これらが部分経験であり、その部分経験がつながることで「スマートフォンでメッセージを送信する」という全体経験が成立している。それぞれの部分経験にも意味と対象

が見いだされるはずであるし、「スマートフォンでメッセージを送信する」という全体経験にもその意味と対象があるだろう。

意味単位を決定するという作業は、えられたひとつの(場合によってはすでに複数の)経験を部分経験に分けるということでもある。この意味単位に分けるステップでは、分け方にひとつの正解があるわけではない。というのも、「記述そのものに「客観的」な意味単位が在るのではない」(Giorgi, 2009/2013, p.149)からである。

Giorgiは、実際にこのステップを嫉妬に関する経験の記述を用いて例示している。Giorgiともう一人の研究者が同じデータを意味単位に分けているのだが、二人の意味単位は同一ではない。しかし意味単位の区切りが「同じか異なるか」ということは、端的に言って重要な問題ではない」(Giorgi, 2009/2013, p.204)とGiorgiはいう。理由は先に述べたとおりで、その経験の意味の単位がなんであるかを唯一なものにする客観的なものは存在しないからである。重要なことは、それぞれの意味単位がどのように関係し合い、その経験の構造を成立させているかを明確にすることである。ただし、意味単位の区切り方にはふたつの基準があり、ひとつは、心理学的に感度のよいもの(sensitive)でないといけないということであり、また現象学的であることである(Giorgi, 2009/2013, p.148)。

6) 現象学的な表現への変換

意味単位を区切ることができれば、次のステップである。このステップでは、参加者から得たデータを現象学的な表現へと変換することになる。研究に参加し、データを提供してくれている参加者は、現象学的態度をとって経験を語ったりしているわけではないし、その必要もない。しかし研究者はそのデータを現象学的なものへと書き換えなければならない。まずこの意味単位は三人称の表現で書き換えられる。例えば話者の一人称表現「私」は「P」や「彼/彼女」などの表現に置き換えることをGiorgiはすすめている(Giorgi, 2009/2013, p.153)。というのも、一人称表現を使っていると、研究対象者の経験を分析者の体験と同一視してしまう傾向が認められたからだという。この段階では、一人称の表現を三人称の表現に変えるだけで、研究対象者の言葉がそのまま使

われる。そしてそこで語られている経験の「心理学的次元」を明らかにするためにさらに分析が行われる。Giorgiによれば、「心理学的次元は、完璧なかたちで、ただつまみ上げればよだけの状態で、そこに横たわっているのではない。それは探り当てられ、引き出され、仕上げられなければならない。生データは、個別化された具体的経験であって、それらには、いわば後光や、語られていない余白や、相互間の結びつきがあり、それらが、展開する潜在的可能性を提供しているのである」(Giorgi, 2009/2013, p.150)という。したがってこの段階では、研究対象者が実際に語った言葉以上の事柄が記述されることになる。これは現象学にとって不思議なことではない。Husserlもたびたび現象学によって行われる志向的分析で明るみに出される経験に含まれる顕在性と潜在性について言及している。

それが常に行なっている本来的な仕事は、意識の顕在性のうちに含まれている潜在性を露呈することである。これによって意識において思念されているもの、つまり、対象的な意味を解釈し、明瞭化し、解明することが、ノエマ的な観点から行われる(Husserl, 1950a/2001, p.91)

例えば私がサイコロを知覚するという経験をしているとしよう。もちろん私にとってサイコロは全面的に見えているわけではない。サイコロの一部は見えており、別の一部は見えていない。見えている面をサイコロの顕在的な面と考えると、あるはずではあるが実際には見えていない部分は潜在的な面である。サイコロの見えている面だけがそのサイコロをサイコロたらしめているわけではない。サイコロの見えていない面にもその面の数字を意味する刻印が彫られていこともまた、そのサイコロをサイコロたらしめるものであるし、相関的に、サイコロの知覚という経験を成立させることにもなる。Giorgiが後光や余白といった言葉で意味しているのは、ここで述べているように、見えているものがそのものであるために不可欠の見えていないものことであり、見えているものだけでなく、それらを明らかにしていくことが求められている。

7) 想像変容

Giorgiの分析は、特定の個人の経験を目標としているのではないと述べているのを見たように、経験の構造が中範囲のレベルにおいて一般化されることが求められている。そしてこの一般化が分析の最後の段階である。

例えばある疾患に関する経験について研究している場合、患者個人によってその経験は異なることはある意味では当然である。しかしGiorgiは、「事実は異なっても、心理学的意味は同一であることがありえる」(Giorgi, 2009/2013, p.151)として、そうした一般性を目指している。

したがって研究者は、個人的な、あるいは個性記述的な発見に限定されることなく、何人かの個人データにもとづいて、研究している現象に対する一般的な構造に到達しようのである。(Giorgi, 2009/2013, p.151)

しかし一般的な構造は簡単にえられるものではなく、「時間がかかる過程」(Giorgi, 2009/2013, p.152)であり、データを「想像的に変え、多様化しなければならない」(Giorgi, 2009/2013, p.152)のであり、適切な表現を見いだすまでくり返し構造を書き直す必要があるとGiorgiはいう。そのために用いられるのが想像変更による本質直観の手法である。ただし、先にみたようにGiorgiは「中範囲」の中で起こる一般化をえようとしている。

この最後のステップで、研究者は、その経験のもっとも不変な構成要素を決めるために、もう一度[自由]想像変容を用いなければならない。この過程で重要な基準は、ある潜在的可能性のある構成要素が仮に取り除かれたとしたら、その構造が崩壊するかどうか、ということである。もし崩壊するなら、その構成要素は本質的である。もし構造が崩壊しないならば、その構成要素は本質的ではない。(Giorgi, 2009/2013, p.226)

ここでは想像変更による本質直観と全体と部分の理論の二つを併せて考える必要がある。先に「朝食を摂る」という経験を取り上げて、どのような部分経験が「朝食を摂る」という全体経験が成立するのに必要なものかということを検討した。例えば、「メールをチェックする」

ことがなくても「朝食を摂る」経験は成立するが、「目玉焼きを焼く」という経験がなければ「朝食を摂る」という経験が成立しないとしよう。そうすると、「朝食を摂る」経験は「目玉焼きを焼く」経験によって基づけられている。しかし、「目玉焼きを焼く」という経験だけが、「朝食を摂る」という経験にとって不可欠の経験なのだろうか。目玉焼きを出発点として、その経験を任意に変化させてみると、「ソーセージを焼く」、「魚を焼く」等といった変項を作り出すことができる。あるいは「焼く」のではなく、「茹でる」という変化も加えてみれば、「卵を茹でる」、「ソーセージを茹でる」、「魚を茹でる」といった変項をつくり出すことも可能である。食材を変えたり、調理方法を変化させることでさらに多様な変項をつくり出すことは可能である。こうした変容の過程を経てえられるのは、「食材を調理する」という一般的な経験である。もちろん、朝食という制限がつけられることによって、食材であれば何でもよいというわけではないかもしれないので、詳細に検討すれば、食材という一般性よりももう少し狭い一般性が見いだされるかもしれない。いずれにしても、Giorgiが目指しているのは、ある特定の日の特定の朝食という一度きりの経験ではなく、それよりは一般性の高い「朝食を摂る」という経験が成立するために不可欠の部分経験を明らかにし、その関係を記述することと理解できる。そのために想像変容という操作が必要であるし、必要不可欠な部分経験を特定するために基づけ関係の理解が必要となる。

IV. おわりに

ここまでGiorgiの現象学的心理学の方法をその段階にしたがって追ってきた。ここで最後に、その方法の段階をまとめておくことにしよう。

第1段階 他者からの叙述をえる

第2段階 現象学的還元の状態をとる

第3段階 不変な心理学的意味を求め探求

3-1 全体の意味を求めて読む

3-2 意味単位の決定

3-3 参加者の自然的態度の表現の現象学的心理学的に感受性のある表現への変換

最後の3-3の表現を変換するという手続きのうちに

は、想像変容によって、その一般的な構造を明るみに出すことも含まれている。このように考えるなら、Giorgiの方法は、大きく見れば3段階、より細かく見れば6段階の順序を経て構成要素間の基づけ関係とされる経験の構造を明らかにしようとしているといえる。

本稿では、上記の段階を経て経験の分析をする中で必要な二つの理論も明らかにした。Giorgiの現象学的心理学における本質直観の重要性については野村(2015)が詳しく論じている。他方で、全体と部分の理論の重要性についてはこれまで見逃されてきた。しかしGiorgiが経験の構造を構成要素間の基づけ関係として定義する以上、全体と部分の理論を無視して、分析を行うことはできないということを明らかにした。

現象学はあくまでも経験にもとづき、その経験を丁寧に分析することを要求している。その意味で、現象学的分析の結果は、ある意味では当たり前の事柄しか出てこない。なぜなら、それは経験されていることであるから。しかしその当たり前のことは、普段は見過ごされているかもしれない当たり前でもある。それを見いだすためのひとつの方法がここで提示したGiorgiの現象学的心理学の方法である。

本稿ではHusserlの超越論的現象学の基本的な特徴と、それをGiorgiがどのように変更し、自らの現象学的心理学の方法を提示しているのかということを中心にすることが目的であり、分析の実際については何も提示していないので、その点については今後の課題としたい。

謝 辞

本研究は科研費(17K02145)の助成を受けたものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

註

- 1) 以後単に経験という場合、志向的経験のことを指す。
- 2) ノエシスとは、意識の作用の側面のことであり、ノエマとはその意識によって意識されている対象のことである。
- 3) Husserlのこの立場変更については、例えば彼自身がそのことを語っている『現象学の理念』を参照せよ。
- 4) この「態度」という言葉の原語はEinstellungである。Einstellungには確かに態度という意味があるが、それ以外にカメラの焦点を合わせるという時の焦点という意味もある。現象学に関する英語の文献でもEinstellungはattitudeと訳されていることが多いが、focusという訳語を採用している場合もある。「態度変更」というと、姿勢を変えるようなイメージがあるが、視線を変える、焦点のあて方を変えるという意味で理解する方が分かりやすいのではないかと思う。
- 5) Langdridge(2007/2016)はGiorgiの構成要素と単素の区別に言及しているが、それを明確にHusserlの全体と部分の理論に結びつけることまではしていない。
- 6) とはいえ本質直観は直観である以上、演繹でもない。
- 7) だから全体的経験の意味と対象が成立する。

文 献

- Giorgi, A. (2009). *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*. Pittsburgh: Duquesne University Press. 吉田章宏(訳) (2013). *心理学における現象学的アプローチ 理論・歴史・方法・実践*. 東京: 新曜社.
- Husserl, E. (1928). *Logische Untersuchungen. Zweiter Band; Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. I. Teil. Vierte Auflage*. Halle: Max Niemeyer. 立松弘孝, 松井良和(訳) (2015). *論理学研究 3*. 東京: みすず書房.
- Husserl, E. (1950a). *Husserliana Band I Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*. Haag: Martinus Nijhoff. 浜渦辰二(訳) (2001). *デカルト的省察*. 東京: 岩波書店.
- Husserl, E. (1950b). *Husserliana Band III Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. Haag: Martinus Nijhoff. 渡辺二郎(訳) (1979). *イデーン I-I 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想第1巻純粹現象学への全般的序論*. 東京: みすず書房. 渡辺二郎(訳) (1984). *イデーン I-II 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想第1巻純粹現象学への全般的序論*. 東京: みすず書房.
- Husserl, E. (1964). *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. (Landgrebe, L.編) Hamburg: Classen Verlag. 長谷川宏(訳) (1975). *経験と判断*. 東京: 河出書房新社.
- 河島光代 (2020). 分岐粥腫型梗塞を発症した進行性脳卒中患者の病の体験の特徴. *聖路加看護学会誌*, 23(1-2), 30-36.
- 今野浩之, 大森純子 (2021). 地域で生活を継続する統合失調症を持つ者の回復の経験. *日本看護科学会誌*, 41, 772-779.
- 京田亜由美, 神田清子 (2018). 自宅で限られた命を生きるがん患者の"生と死"に関する体験. *日本看護研究学会雑誌*, 41(5), 959-969.
- Langdridge, D. (2007). *Phenomenological Psychology Theory, Research, Method*. Harlow: Pearson Education Limited. 田中彰吾, 渡辺恒夫, 植田嘉好子(訳) (2016). *現象学的心理学への招待 理論から具体的技法まで*. 東京: 新曜社.
- 永井庸央, 藤田佐和 (2017). 外来通院する造血細胞移植後早期の患者のライフコントロール. *日本がん看護学会誌*, 31,

92-100.

- 名城卓哉 (2018). 児童養護施設で働く上で必要な養育観についての現象学的分析. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 13, 33-49.
- 野村文宏 (2015). ジョルジの現象学的心理学と、現象学的方法の応用の問題. 別府大学紀要, 99-112.
- 小野澤かおり, 正岡経子 (2020). 母体血清マーカー検査の結果が陰性で健康な児を出産した女性の検査後から育児期までの体験. 母性衛生, 61(1), 41-49.
- 関隆裕, 井上玲子, 鈴木和子 (2020). 認知症の父親の介護を引き受けた息子の体験. 家族看護学研究, 25(1-2), 201-212.
- 白石悦子, 井上玲子 (2020). 高次脳機能障害となった孫をもつ母方祖母の経験. 家族看護学研究, 25(1-2), 102-112.
- Sokolowski, R. (2000). Introduction to Phenomenology. New York: Cambridge University Press.
- 橘ゆり, 入江亘, 菅原明子ほか (2021). 医療的ケアが必要な在宅重症心身障害児を亡くした親の体験. 日本小児看護学会誌, 30, 9-16.
- 高橋奈津子 (2018). 乳がんサバイバーの妊孕性温存に関する意思決定過程における女性の生き方 受精卵凍結保存の意思決定過程に焦点をあてて. 日本がん・生殖医療学会誌, 1(1), 45-50.
- 豊岡望穂子, 松井弘美, 長谷川ともみ (2018). 初めて妊娠糖尿病と診断された女性の妊娠期から産褥早期までの主観的体験. 日本母性看護学会誌, 18(1), 31-37.
- 植田嘉好子 (2018). 対人支援領域における現象学的研究の動向と展望－医中誌5年分の調査から. 川崎医療福祉学会誌, 1-14.
- 植村玄輝, 八重樫徹, 吉川孝ほか (2017). 現代現象学 経験からはじめる哲学入門. 東京: 新曜社.
- 山本千尋, 伊藤由美, 藤田和佳子ほか (2018). 多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)と診断された若年女性の思い. 母性衛生, 59(2), 355-364.

The Structure of Experience

– The Method of Giorgi's Phenomenological Psychology –

Tomoki Kihira

Abstract

This paper aims to provide a clear picture of Giorgi's method of analyzing phenomenological psychology. Although considered an important phenomenological approach in qualitative research, Giorgi's method is not always applied consistently. To remove procedural ambiguities, this paper elucidates his analytical process and what he seeks to reveal. As a source, we have drawn on *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Husserlian Approach*, in which his methods are systematically presented.

Giorgi makes two changes to Husserl's transcendental phenomenology to bring it in line with the aims of his phenomenological psychology. First, the analysis is not transcendental but phenomenological-psychological and, therefore, the phenomenological-psychological reduction is carried out. The other is that Giorgi is not looking for a universal essence, but for the structure of experience, defined as a relation between constituents. As a procedure for revealing this structure of experience, this paper argues that an understanding of Husserl's theory of essential intuition and the theory of whole and parts, which has not yet been explicitly shown, is necessary.

From a reading of Giorgi's work, it is clear that the analysis proceeds in the following stages.

Stage 1 consists of soliciting narratives from others. Stage 2 consists of adopting an attitude of phenomenological reduction. The third stage is to search for the invariant psychological meaning and can be divided into the following steps: First, the meaning of the whole is identified. The next step determines the unit of meaning. The last step involves the transformation of the participants' natural attitudinal expressions as phenomenologically and psychologically sensitive. Analyzing the data through these steps and revealing the structure of the experience is the method of Giorgi's phenomenological psychology.

Key Words: Phenomenology, Phenomenological psychology, Giorgi, Whole and parts, Imaginative variation